

マダム見聞録

No. 9 最終回

藤井由佳(協同総合研究所)



百聞は一見に如かず

私が協力隊に参加した理由は、以前から教育の原点のようなものをどこかで見つきたいと思っていたからだ。なぜ学校というものがあるのか、なぜ勉強をしなくてはいけないのか、ということは何度考えても納得できる答えは出てこないし、誰かに聞いても曖昧にわかったようになるだけだった。だから、学校に行きたくても学校が近くなかったり、農作業を手伝わなくてはいけない状態にあったり、家が貧しくて学習用具を持つことができなかつたりする子どもたちがたくさんいると思われる開発途上国へ行って、実際にその子たちと勉強すれば、何かがわかるのではないかと思ったのだ。百聞は一見に如かず。本もテレビもたくさんのかんことを教えてくれるが、自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の言葉で答えを掴みたかった。

そして出発の日、フィジーへ向かう飛行機から見た白い砂浜と水色や青色の南国色をした海は忘れられない。空港から出たときの蒸し暑さと、太陽の強さと、鮮やかなハイビスカスの色も忘れられない。少しばかりあった不安は一気に吹き飛んで、何だか陽気な気分になされた。この気分はそれから二年間、波はあったけれども、ずっと持

ち続けていたものだった。それは私が特別だったわけではなく、フィジーを訪れた多くの人々がそう思うことで、フィジーという国がそうさせていたのだ。

一期一会

フィジーの人たちは優しくかった。私の母親の年代のおばちゃんたちは、「外国で一人で暮らさなくてはいけないなんて、なんてかわいそうなの。」と心配してくれたし、父親の年代のおじさんたちは、「いくら町へ買物に行きたいからって、顔の知らない奴の車には乗っちゃいけないよ。」と注意してくれたし、同僚や生徒はいろいろな所へ連れて行ってくれた。みんなにたくさんのかんことをしてもらって有難くて仕方がないので、申し訳なさそうにしていたら、「キリスト教ではね、遠慮しちゃいけないことになっているんだよ。」と言う生徒もいた。それは都合のよい解釈だけれども、家族以外の間人同士が、お互いに頼ったり甘えたりできる関係でいられるのは素晴らしい。慣れてくると、みんなは私にも遠慮なくいろいろと言ひ始めて、私はそれがうれしかったり、事によっては腹が立ったりしたが、人々との濃い関係が新鮮でとても面白かった。

彼らの優しさに触れて思ったことは、も

し私が置かれている立場が反対だったら、私は彼らと同じことができるのかということだ。ある日突然、近所や職場に肌の色も髪の毛も言葉も違う人が現れたら、フィジーの人々が私にしてくれたことを、私はしてあげられるのだろうか。

ただ一つ言えるのは、彼らも同じ人間だということ。恥ずかしながら私は、それまで外国人を同じ人間とは見ていなかったように思う。言葉が通じないことを理由に、話しかけなかったり、遠巻きに見ていたたり、彼らに近づくことに抵抗を感じていた。でも今は、そのような抵抗感はほとんどなくなって、それほど緊張せずに誰とでも話せるような気がする。

蛙の予は蛙

学校ですっと気になっていたのは、生徒がすぐに物をなくすことだ。全く物を大切にしない。新しいペンをうれしそうに使っていると思えば、その日の午後にはもうなくしている。教室に床には持ち主不明の消しゴムや鉛筆が転がっている。筆記用具よりも高価なノートや、学校が貸し出している教科書も容赦なくなくす。学年末に教科書を回収すると、表紙がないものもあれば、真っ二つに切れていて後半部分が全くないものもある。数ページでも戻ってくればいいほうで、なかには丸ごとなくす生徒もいた。しかし、物を大切にしないのは生徒だけではなかった。大人も同じように物をなくすか壊すかする。物を貸すと必ず壊れて返ってきたものだった。

彼らの物を大切にできる意識の低さには驚いたし、その様子にはあきれてしまったが、そもそも自分はなぜ物を大切にできるのかということを考えてみた。親に教わったのか

もしれないし、学校で教わったのかもしれないが、とにかく誰かに言われたり、誰かの様子を見たりして学んだのだと思う。フィジーでは教える人がいないし、例え誰かが教えても、教えた本人が物を大切にできなかったりするので、子どもたちはそういう大人と同じことをしながら育っていくのだ。

「物を大切にできる」は一つの例で、ほかにも「どこにでもゴミを捨てる」「借りたものを返さない」「お金を無駄使いする」など気になることはたくさんあるが、どれも大人が子どもへ伝えていくこと。誰も言わなければ誰も気がつかないが、誰かが言えばみんなが気がつく。私が生徒に折り紙を教えるときは、いつも余ったコピー用紙の裏紙を使い、たまにしか日本のきれいな折り紙を使わせなかったから、生徒は私のことをけちな先生だと思っていたかもしれない。でも、本物を使うといつもより丁寧に折ったり、ノートに貼り付けたりする。そういう物を大切にできる気持ちを少しでも感じてくれていたら、私は満足だった。

何かを教えるのは時間がかかることだし、いくら待っても結果が出ないこともある。でも、ずっと後に大きな力となる可能性もある。時間の感覚のないフィジーで、あせらずに非常に気長に彼らと付き合うことができたことを光栄に思う。

灯台下暗し

日本に帰ってきて、近所の小学校で臨時講師をした。期間は3月の1ヶ月間だけ。その学校では算数の時間だけクラスを2つのグループに分けて、担任教師と算数担当教師が1グループずつ教えるという少人数教育を行っていた。2月に入って算数担当教師が病気になられて年度中は欠席することになった

ので、そのとき無職だった私に話があったのだ。私は1、2年生の算数を担当した。担当したと言っても、3月は学年末でまとめの月なので、新しく勉強することはほとんどなく、子どもたちは今まで学んだことを復習する毎日だった。そのため、算数の授業だけでなくほかの授業にも顔を出すことができたし、休み時間は子どもたちと思い切り遊ぶことができた。また、幸運なことに卒業式にも参列した。(最近「卒業式」とは呼ばずに、「卒業証書授与式」や「お別れの会」としたりするようだが、ここでは卒業式と記す。)6年生は担当していなかったのだから、こんなに客観的な立場で参加する卒業式はほかにないだろうと思いながら見ていた。卒業式というものは、自分が卒業するときには参加しないし、教師をしていたフィジーでは日本のような卒業式はなかったのだ。

はじめに卒業証書の授与があり、学校長式辞、来賓のお祝いの言葉などが終わり、いよいよ「よびかけ」が始まる。「よびかけ」は、何人かの子どもが代表して「おとうさん」「おかあさん」「ぼくたち」「わたしたちは」「いま」「そつぎょうします」というようにみんなの気持ちを代弁していくもの。どの子どもも大きくはっきりと声を出して、その力強い声と最後の合唱だけでも感動したが、それよりも衝撃的だったのは、よびかけがすべて終わって卒業生と在校生が着席した後だった。着席した瞬間、多くの子どもたちが一斉に咳をしはじめたのだ。よびかけの間はきっと我慢していたのだろう、会場は静まり返っていて、よびかけの声や歌声がとても美しく響いていた。私は、小学生の子どもたちでさえ、みんなのために気持ちをひとつにして頑張ることができるのか、き

ちんと咳を我慢することができるのかと感動した。フィジーと日本では、歴史や文化があまりにも違うので比べることはできないかもしれないが、フィジーの高校生はあんなに減り張りのある態度をとれるだろうか。とれないのではないだろうかと思ったのだ。

全員が咳を我慢するのは簡単なことではない。小学生でもそれがきちんとできることに私はとても感動して、日本の教育はすごい、そして、「私もその教育を受けてきたんだ」と思うと自分にも感動してしまって涙が止まらなかった。

思い立ったが吉日

先輩教師と話していて印象に残った言葉があった。「学校の中って時間が止まっているみたいでしょ。」そのとき私は、久しぶりに小学校に訪れている懐かしさから、変わっていないことに対してうれしいと思ってしまったのだが、よく考えてみると本当に学校は変わってなくていいのだろうか。

最近、『学校をつくろう!』(藤原和名著、TOTO出版)という本を読んだ。著者は建築家で、伝統と人情の街、博多の真ん中で、統廃合によって新しく生まれた市立博多小学校をデザインしていく過程を詳しく紹介している。テーマは「学校は子どもたちのもう一つの住居」、そして「地域と一体となった学校」。彼女は、トイレが汚いのも、教室が暑いのも寒いのも、学校だから我慢しなくてはいけないと多くの人が思っていることに疑問を持ち、こう言っている。「子どもたちの家庭における生活環境は格段の進歩を遂げているのに、学校という空間だけは30年、40年前のままの姿で取り残されてきた。『今までがこうだったから』とか『他校もこうだから』と、行政が一步も前へ踏み出そう

としなかったからである。」

子どもにとって学校は、家庭から外へ出るときの第一歩目。さらに広い世界へと飛び立つ前にいろいろと準備する所だと考えると、学校は世界へ通じる入り口なのだ。だからこそ、時代が変わるにつれて学校も変化していかなくてはいけない。変化していない学校からは、世界へとつながる道はきっと長くて、そこを通らなくてはならない子どもたちは苦勞を強いられるし、途中で疲れてしまうかもしれない、道に迷うかもしれない。でも、元気がなくなったときに支えてくれる大人は近くにいない。不登校や犯罪の低年齢化など、子どもをめぐる問題は次々と出てくるが、その原因は子どもにあるのではなく、私たち大人の中にある。日本でもフィジーでも子どもは大人が生きているように生きるのだから。私は、子どもたちのためにも自分のためにも、毎日楽しく生きていこうと思うし、子どものそばにいて彼らを少しでも支えていける存在になりたい。

井の中の蛙大海を知る

物事を知れば知るほど自分がすべてでないことを知り、ほかの意見を聞くと自分だけが正しいわけでもないことを知る。外国へ出ると、日本人が自分ひとりだけという

状況になりやすく、嫌でも自分の小ささを感じるので、自分以外のことに視野を広げざるを得ない。だから外国に行くことはとても良い経験だとは思いますが、本当は日本国内でもそういう感覚を身に付けられるような教育がなされるべきなのだろう。

学校に行けばいろいろな人に会える。家族だけでは教えられないいろいろなことを学べる。好き嫌いを感じるより前に、どの分野もバランスよく学ぶ。どれが好きか選ぶのは子どもの仕事。世界を広げようという気持ちを支えるのが大人の仕事。前へ進んでいくのも迷うのも挫折するのも子どもの仕事だけれど、何かあったときに受け止めるのは大人の仕事。家では学べないことを学べるのが学校であるし、勉強するのは自分と外の世界をつなぐ道を見つける手段。学校は、子どもや保護者、周囲の大人にとって、もっと身近で暖かくて魅力を感じさせるものになっていかなくてはいけない。それと同時に、大人の社会へも本当の暖かさを発信していきたい。



Vinaka Vakalevu (ビナカ バカレブ)

どうもありがとうございました。

2005年3月 藤井 由佳